

日本経済新聞

5月16日
月曜日

食事・入浴も細かく手助け

「体力に自信がない」「介護が必要で家族に負担がかかる」などの理由から旅行をためらう高齢者は多い。この層を顧客として取り込むため、SPI(東京・渋谷、篠塚恭一社長)が手がけるのが「介護旅行」だ。ヘルパー資格を持つ添乗員

会社概要

設立 1991年
売上高 2億2000万円
(04年6月期)
経常利益 280万円
(同)
従業員数 7人
(05年4月末現在)

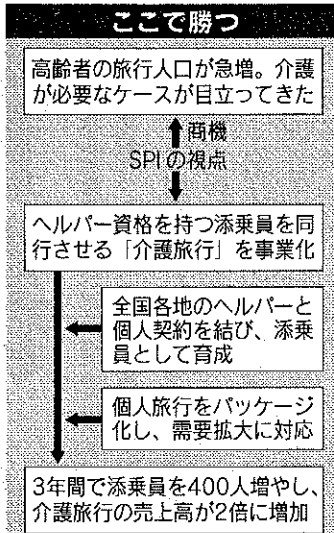


SPI 介護旅行の企画・主催

が同行して食事や入浴を補助する。きめ細かいサービスで高齢者の支持を集め、事業を拡大している。

介護旅行には「トラベルヘルパー」と呼ぶヘルパー資格を持った添乗員が同行する。ヘルパー二級の人材に旅行添乗員としての研修を実施。介護が必要な高齢者に付き添わせ、名所案内と介護サービスを提供する。旅程の間付きつきりとなるサービスだけでなく、「移動は大丈夫だが、現地

の案内を頼みたい」などヘルパーの使い方は様々。一人ひとりの要望に対応する。料金は国内旅行の場合、報酬を一般のヘルパーの一



介護のプロであるヘルパーが付き添うことで旅行への不安を軽減する

添乗員の人件費や交通費などを含め、二泊三日で平均二十万〜三十万円。手厚い介護が必要な場合や夜間などには割増料金になる。SPIはトラベルヘルパーと業務契約を結び、旅行ごとに仕事を発注する。優秀な人材を確保するため、報酬を一般のヘルパーの一

勤務していた篠塚社長が一行の販売を始め、業務を効九一年に設立した。旅行市場が成熟するなか、高齢者の需要を見込んで九八年に介護旅行を開始。転機は二〇〇〇年導入の介護保険制度だった。ヘルパー資格を持つ人が急増し、添乗員が集まりやすくなったこと

「旅はハレの場を演出する一つの手段」と語る篠塚社長には忘れられない光景がある。昨年三月、沖縄周遊クルーズに下半身不随で認知症(痴ほう症)の八十歳代の男性が参加した。元気なところは社交ダンスが趣味だったと聞き、船内のダンスホールに連れていくと、突然体を揺すり始めた。普段は笑顔を見せない男性の顔が輝いていたという。地道な営業活動やトラベルヘルパーの育成支援によって、同社の介護旅行の年間利用者は〇五年六月期に前期の一・六倍にあたる八百人を見込む。売上高も一四〇〇年の二億五千万円と予想。利用者の拡大に伴い、バリアフリー設備の整った受け入れ施設の確保や、内外のトラベルヘルパーのネットワーク構築が課題となる。(古山和弘)